校長室だより

令和８年度
１１月６日
NO. ２６

深まる秋、輝く作品、積み重なる学芸会への思い…。

「誰でも異文化を学び、その状況に自己を調整することができる。異文化に属する人同士でも、学び合い理解し合うことができる」
『文化はいかに情動をつくるのか』
（紀伊國屋書店）バチャ・メスキータ著










学芸会に向けて、みんな一生懸命練習をしています。個性が輝く「おかざきっ子展」作品

山際から沸き立つ霧が、秦梨の山に漂います。朝の冷たい空気が秦梨の里を包み、吐く息が白く感じられる時もあります。伝説の「いぼ洗いの水」のある天恵峡の紅葉も、ひっそりと彩り始めます。足音を立てずに、秋は里にしみ込んでいきます。

きれいな紅葉は、一日で鮮やかに燃え上がるわけではありません。日照時間や気温が下がっていくことなど、自然の営みの中で時間をかけてその姿を作っていきます。それは、学習活動においても同様であると言えるでしょう。陸上大会に出場した選手は、じっくり時間をかけて体を作り鍛え、そして整え大会というハレの時を迎えます。おかざきっ子展の作品作りでも、様々なアイデアや工夫を深め、納得のいく作品を作り上げます。

先日、東海北陸の校長先生の会があり参加しましたが、「おかざきっ子展」や様々な研修システムについて、関心をもたれます。例えば「おかざきっ子展」は第六十三回を迎えるなど、もはや岡崎の文化とも言えます。「文化」と呼ばれるためには、受け継がれる理念や思いの下、自然の営みのように熟成されなければなりません。その中で子供たちは、毎年、「こんなものを作ろう」「こんな思いで作ろう」など、手を掛け、思いを掛け、ＡＩには作れない、自分だけの作品を作ります。

学校では、学芸会に向けて、教室や体育館だけでなく廊下にも、声やその思いがあふれ出ます。秦梨小にとっても、学芸会は一つの「文化」でしょう。大きな学校では、時間的にも人数的にも個々の活躍が見えづらく、劇自体がないところもありますが、秦梨小にとって学芸会は、永年、一人一人それぞれが、自ら輝く大事なハレの日になります。深まり輝く秋のように、積み重ねられたものや思いを見ていただければと思います。

・７日の、中総でのおかざきっ子展、総合学習センターでの理科作品展、技・家作品展、お時間があればぜひ、ご覧いただければと思います。
・14 日には学芸会が開催されます。ぜひご覧いただければと思います。また本年度も、係のお仕事をお手伝いいただくＰＴＡの皆様、ありがとうございます。よろしくお願いします。
・19 日からは、かけ足が始まります。行事が続きますが、体調管理に気をつけていきたいです。